東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構・外国人児童生徒教育推進ユニット 主催

2024 オンライン研修「多様性が活きることばの教育」

研修 B 幼・小・中・高を結ぶことばの学び

第3回研修会の報告

テーマ「自己表現を支えることばを生む環境作り
～社会とわたしを繋ぐ～」

1 実施状況（概況）

開催日：2024 年 8 月 22 日
参加者：88 名
アンケート回収数： 56 件 （63.6%）

研修資料について
教育・研修を目的とした場で参照資料としてのご提示に留めてください。部分的な切り取りや、加工はお控えください。また、本事業資料である旨を明示してご利用ください。

プログラム （下線：公開可能な資料）

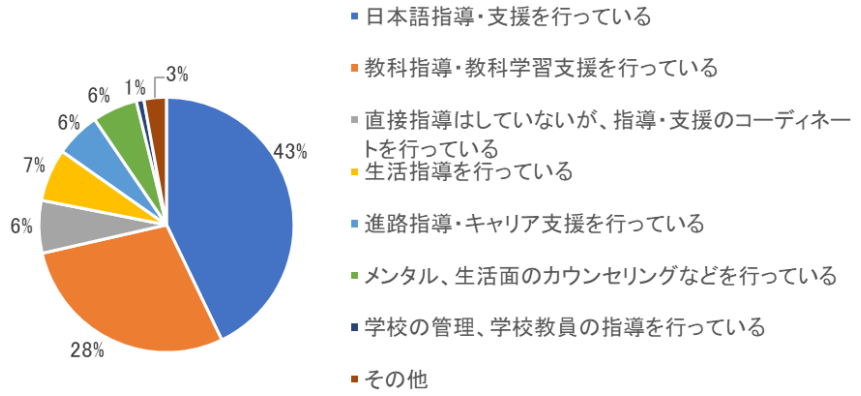
13:30−14:00	趣旨説明・講義 「アイデンティティから考える自己表現とことばの教育」 米本和弘 （東京学芸大学）
14:00−14:50	実践事例の報告「自己表現を支えることばを生む環境作り ～社会とわたしを繋ぐ～」 報告1 岐阜県可児市立蘇南中学校 教諭 青山岳史 報告2 別府市教育委員会日本語指導員・多文化に生きるこどもネットワーク大分 立山愛
14:50−15:55	交流「授業づくり」
15:55−16:00	閉会

2 研修ねらいと目標 ※文部科学省 「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の「豆の木モデル」（日本語教育学会 2019）に基づき設定

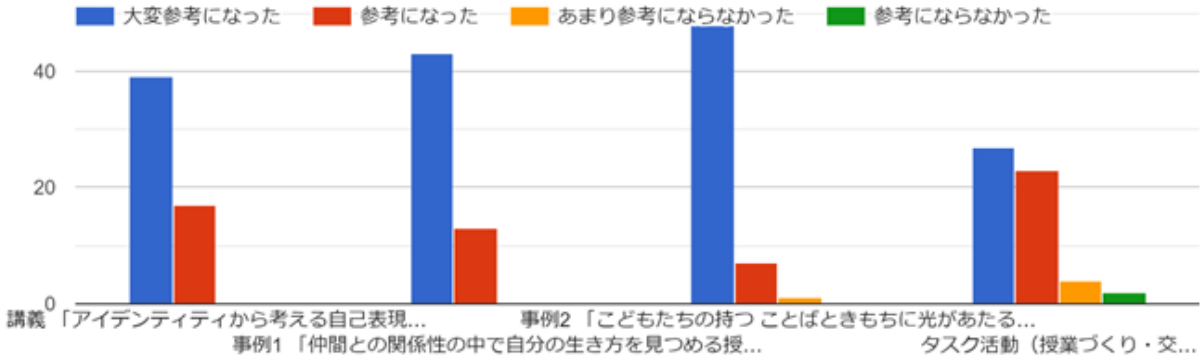
資質・能力	具体的目標
・育む力（日本語・教科の力の育成／異文化間能力の涵養）	セ 学校内外の生活・学習に結び付けて、日本語や教科の指導・支援、内容 （教科等）と日本語を統合した指導・支援をすることができる。 タ 子どもの母語、母文化、アイデンティティを尊重し、学級・学校・地域における社会参加を促すことができる。

3 アンケートより

〈参加者の子どもの日本語教育への関わり〉



＜参考になったか（満足度）＞



＜参加者の声＞

自分について自分の言葉で表現できることが達成感に繋がり、本人にとって自信となっていく。このような経験を積み重ねていくことがアイデンティティ形成に大事である事が大変参考になりました。また、国際教室内だけでなく、彼らが自分を表現できる場を拡げられるサポートもできればと思います。まずは授業内で、彼らが学校生活の中で今求めている事を知ることから始めようと思います。授業時間内にフリートークの時間を設けようと考えています。

児童の要求から日本語支援を考えていく視点。また、社会的な役割を任される機会を作っていくことが大きな成長につながること。
日本語指導を教科、学習の中に限定せず、学校生活丸ごとのなかで考えていきたい

子どもたちのアイデンティティを大切にした実践の具体がとても参考になりました。アイデンティティと言語教育のつながりについて、改めて書籍等で勉強し直したいと思いました。

事例発表の先生方の熱い想いが伝わってきました。2 学期からも担当児童に愛をもって接していきたいです。

4 研修企画者より

研修 B 第 3 回は、「自己表現を支えることばを生む環境作り～社会とわたしを繋ぐ～」をテーマに、事前の講義動画視聴、講義、実践報告、授業づくりのタスク活動を行いました。

事前の講義動画では、子どもの日本語教育は、単なる日本語の知識や技能の獲得ではなく、世界を広げながら成長発達していくことを支えるための全人的な教育であること、そのためにはライフコースにおける社会的役割や社会参加、学びの連続性、肯定的なアイデンティティが重要であるという概論を共有しました。当日の講義では、アイデンティティの概念を捉え直した上で、自己表現とことばの教育のデザインについて紹介しました。実践報告では、報告①の青山先生は、中学校の国際教室における総合的な学習の時間、道徳科、日本語指導における実践例から、各々の子どもたちが仲間と関わり合いながら、自分の生き方を見出していく授業の内容構成をご紹介くださいました。発表の準備では、母語でも日本語でも自分の考えを深められる言語を用いて調べ学習をしたり、他とやりとりを重ねたりしながら、課題に取り組む生徒の姿がありました。報告②の立山先生は、子ども自身の切実な思いを丁寧にくみ取って日本語学習の素材にした授業をご紹介いただきました。児童は、在籍級の皆と友達になりたい、在籍級の一員として役割を果たしたいという思いを日本語で実現させていました。さらに、母語で自己を表現したいという思いを地域の活動で実現させる取組もご紹介いただきました。いずれも目の前の子どもを真ん中に置き、最終目標に向かうプロセスには先生方の細やかな工夫がありました。最後に、授業づくりのタスク活動では、小グループで各自が担当する子どもを想定して「ことばで自己を表現する活動」の案を考え、主に子どもを真ん中においた授業になっているかという点から活発な意見交換がされていました。

本研修は、改めて集住地域や散在地域、立場など条件は異なっていても、日本語指導支援担当者だからこそできることがあり、大きな可能性があることを感じられる研修となりました。